

# 管理栄養士養成課程学生における大学間学生交流活動の阻害要因に関する探索的研究

神崎 秀嗣<sup>†</sup> 菅原 良<sup>‡</sup>

<sup>†</sup> 秀明大学 看護学部

<sup>‡</sup> 明星大学 教育研究機関明星教育センター

キーワード：キャリア形成, 大学間交流, 阻害要因, 管理栄養士養成課程

## 1 はじめに

中学生の調査では、家族や友人とのコミュニケーションが職業選択の基盤となる能力・態度・知識等の自己評価、すなわちキャリア意識(人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定)の発達に寄与する可能性が示唆されている<sup>1)</sup>。

厚生労働省<sup>2)</sup>はキャリア教育の視点から大学生が獲得すべき能力として、「就職基礎能力」や経済産業省<sup>3)</sup>による「社会人基礎力」をあげている。これらとの重複の多い概念として「ジェネリックスキル」があり、創造性、柔軟性、自立性、チームワーク、コミュニケーション力、批判的思考、時間管理、リーダーシップ、計画性、自己管理能力など、特定の文脈を越えて、様々な状況のもとでも適応できる高次スキルのことである<sup>4)</sup>。

一方、経済産業省<sup>5)</sup>が全国の企業人事採用担当者に対して実施したアンケート調査(有効回答:1,179件)によれば、学生に不足していると思う能力は、「主体性」(20.4%)、「コミュニケーション力」(19.0%)、「粘り強さ」(15.3%)の順となっている。またBenesse教育研究開発センター<sup>6)</sup>が若手社会人を対象とした調査(社会人:民間企業(従業員数300人以上・1次産業を除く)、官公庁勤務または専門職(看護師、教師など)の正規職員、大学または大学院卒、社会人1~3年目:1,732人)によると、社会で求められる力として「問題解決能力」「継続的な学習力」「主体性」「チームワーク力」「自己管理能力」などの能力やスキルを上位に上げている。グループワークでディスカッションを高校までに経験した学生は29.1%、自分の意見や考え方を発表する授業を経験した学生は41.1%と多くない。特にコミュニケーション能力は、企業・官公庁など組織で働くために、また個人がより豊かなライフキャリアを歩むために大切な力とされている<sup>7)</sup>。実際、大学での人間関係に対して不安感を抱いている学生が70.9%にのぼる<sup>7)</sup>。学生のキャリア形成において重要とされるコミュニケーション能力を獲得す

るためには、普段の行動を共にする友人層ではない、異質の他者との意見や情報の交換などを通じた接触が重要であるとし、大学生にとって大学間学生交流の場が、そのような場になるとしている<sup>8)</sup>。医療系専門職は、患者や家族への医療内容をわかりやすく説明する必要があり、良好な人間関係を築くためにも、またチーム医療を円滑に行うためにもコミュニケーション能力や積極性が必要である。しかし、詳細に検討された事例が少ない。より異質性の高い他者との意見や情報の交換などを通じた接触が、コミュニケーション能力や積極性には重要であると考えられている<sup>9)</sup>。大学の授業で「社会で必要な力」が養われたと認識している学生は少なく、社会と学生のギャップが明らかになっている<sup>6)</sup>。

大学生はインターンシップやサークル活動を行う。筆者らは、大学間学生交流を阻害する要因を測定するための「学生による大学間交流尺度(Scale of Inter-university Exchange by the Student)」を開発し(表1)、2013年11月~12月に秋田県内のA大学、B大学、C短期大学の486名の学生(Nm:193、Nf:292、N.A.:1)を対象にして調査を行った<sup>8,11)</sup>。得られた調査結果を基礎データとして、学生による大学間交流尺度を構成する27質問項目群の基底にある共通因子を推定するために、主因子法、Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転による因子分析を行った(累積寄与率が全体の観測変数に対して40%以上になるまで因子を抽出)。その結果、5因子(固有値は、第1因子:5.59、第2因子:3.60、第3因子:1.74、第4因子:1.60、第5因子:1.34)が抽出された<sup>12)</sup>。また、首都圏の文系学部<sup>13)</sup>、理系学部<sup>14)</sup>、短期大学生<sup>15)</sup>について調査してきた。現在医療専門職を調査しているが、臨地実習の影響の有無を考察して

表1 学生による大学間交流尺度  
(Scale of Inter-university Exchange by the Student)

Q1	必要性が感じられない
Q3	大学間の距離が遠い
Q4	大学が交流の場を作ってくれない
Q5	いまの友人関係で十分
Q6	交流しようとする雰囲気がない
Q7	自分の専門分野とは関係ない
Q8	意義が見出せない
Q9	交流するのがわずらわしい
Q10	大学のサポートが不足している
Q11	交流の方法がわからない
Q12	動機や意欲が不足している
Q13	学力差が大きい
Q14	きっかけがない
Q15	合同授業がない
Q16	他大学に興味がない
Q17	大学が少ない
Q18	費用がかかる
Q19	集まる場所がない
Q20	普段の生活が忙しい
Q21	交流イベントがない
Q22	アルバイトが忙しい
Q23	目的を見つけるのが難しい
Q24	学生のコミュニケーション能力が低い
Q25	他大学をよく知らない
Q26	他人との交流が苦手
Q27	メリットが感じられない

いる。そこで、医療系大学と同様、卒業までに臨地実習を行い、大学入学と同時にほぼ進路が決まっている管理栄養士について調査したので報告する。

## 2 アンケート調査

北海道の管理栄養士課程に所属する 360 名の学生 (Nm:44, Nf:315, N.A.:1) を対象にして、2014 年 1 月から 2016 年 10 月にかけて、アンケート調査を実施した。また「学生による大学間交流尺度」を用いたアンケート調査を 5 件法 (1. そう思う, 2. まあそう思う, 3. どちらともいえない, 4. あまりそう思

わない, 5. そう思わない) により実施した (表 2)。またこの調査で得られたデータを基に、得られた理系大学及び文系大学のデータを用いて、「そう思う (1)」に「まあそう思う (2)」を加えた割合を求めた。

## 3 分析

これまで因子分析 (主因子法, Kaiser の正規化を伴うバリマックス回転) を行ってきた。今回、この調査で得られたデータを基にして、5 件法の 1. そう思う=5 point, 2. まあそう思う=4 point, 3. どちらともいえない=3 point, 4. あまりそう思わない=2 point, 5. そう思わない=1 point として、それぞれの人数を掛け合わせ、平均 point を求めた。

## 4 結果

### 4.1 管理栄養士養成課程を対象とした調査から得られたアンケート結果の因子分析

医療系養成課程の学生から得られたデータを基に「学生による大学間交流尺度」27 項目について、質問項目を除外することなく、全ての項目を分析対象とし、最尤法によって因子分析を行ったについて解析を進めている。医療系大学と同様、卒業までに臨地実習を行い、大学入学と同時にほぼ進路が決まっている管理栄養士について調査したので報告する。

管理栄養士養成課程学生の因子分析ところ、6 因子 (それぞれの因子の固有値は、第1因子:6.16, 第2因子:3.50, 第3因子:1.69, 第4因子:1.42, 第5因子:1.20, 第6因子:1.09) が抽出された (表2)。累積寄与率は、全体の観測変数に対して43.71パーセントとなった。析出された因子に含まれる質問項目は、第1因子にはQ4, Q14, Q10, Q21, Q6, Q15, Q11, Q3, 第2因子にはQ8, Q9, Q27, Q1, Q16, Q7, Q5, 第3因子にはQ24, Q26, Q13, Q23, Q25, Q12, 第4因子には Q22, Q20, 第5因子にはQ19, Q2, 第6因子には Q17, Q18 であることがわかった (表2)。

因子負荷量平方和の比較を行ったところ (表 2)、第1因子 (20.8%) 第2因子 (11.1%) が高いことから、第1因子:他者因子, 第2因子:自己因子が析出された。

また管理栄養士と文系, 理系, 医療系の平均 points の比較を行ったところ、27 項目のうち 7 項目 (Q3, Q6, Q10, Q12, Q13, Q14, Q15) で、管理栄養士は高い値を示した (図 1)。

今回得られた管理栄養士と理系大学<sup>14)</sup>及び文系大学<sup>13)</sup>のデータを用いて、「思う (1)」に「やや思う (2)」を加えた割合を質問項目間で比較したところ、管理

栄養士で27項目のうち11項目(Q3, Q4, Q10, Q12, Q13, Q15, Q18, Q21, Q22, Q24, Q26)で理系大学び文系大学よりも高い値であった。また4項目(Q1, Q7, Q9, Q16)では一番低い値をえた。

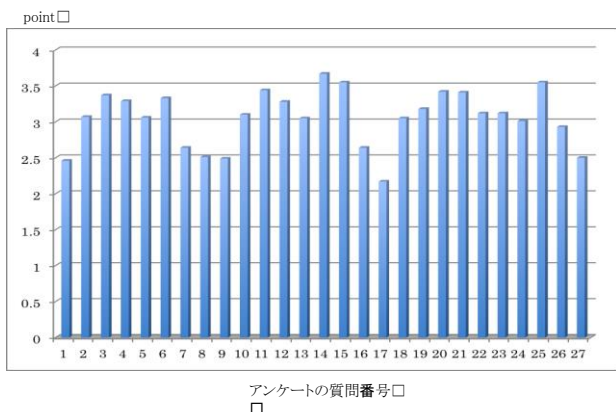


図1 アンケート質問項目と平均 points

表2 文系学部を対象とした調査と管理栄養士養成課程を対象とした調査から得られた因子に含まれる質問項目の比較

1 (因子)	Q21, Q15, Q14, (Q25), Q11, (Q19), (Q12), Q10, Q4, (Q3), (Q24), (Q6), (Q20), (Q13), (Q22), (Q18)
2	Q8, Q27, Q9, Q1, (Q16), Q7, Q5, (Q17), (Q2), (Q26), (Q23)
3	Q24, Q26, Q13, Q23, Q25, Q12
4	Q22, Q20
5	Q19, Q2
6	Q17, Q18

## 5. 考察

「学生による大学間交流尺度」を使って、医療系養成課程の学生を対象として調査を行ったところ、臨地実習の有無が影響しているかもしれないという仮説を立てている。

そこで、文系学生、理系学生と医療系学生の間にあると思われる管理栄養士を急遽調査した。管理栄養士養成課程の学生を対象として調査を行った。その結果、管理栄養士養成課程の学生を対象とした調査では6因子が抽出され、文系学生を対象としたと比較した場合に、第3因子に目的意識や動機の不足、第4因子に学生生活の多忙が析出されることが明らかになった(表2)。

「ジェネリックスキル」を身につけ、向上させていく方法として、職場体験学習である企業インターンシップ研修が挙げられる<sup>16)</sup>。「コミュニケーション能力」「共感する能力」「関わる力」は、インターンシップ前より、インターンシップ後の方が向上していた<sup>16)</sup>。

筆者らは、地方大学におけるインターンシップ受入先企業等の少なさ、受入態勢の脆弱さ(受入プログラムの不確定さ、人員配置の問題等)によって、地方大学に在籍する大学生の職業体験によるキャリア形成の機会が不足しているという問題意識を持っている。これらの問題を克服する可能性が考えられる手段として、大学生が大学の垣根を超えて交流する大学間交流に焦点を当てた。その中で大学間学生交流活動があったとしてもそれらの活動に参加しない学生の「参加しない理由」について検討してきた<sup>11, 12, 13, 14, 15)</sup>。

この問いに関しては、菅原ら<sup>11, 13, 14)</sup>の研究から、他者理由による阻害要因、自己理由による阻害要因により、ほぼ特徴を捉えているものと考えられることが明らかになってきた。本研究における管理栄養士に対する調査の因子分析(表2)と平均pointsの解析からも、同様な特徴が検出された。しかし寄与率は大きくはないものの、第3因子、第4因子、第5因子、第6因子に守られるようなコミュニケーションに対する苦手意識、授業や実験等などの大学生活、アルバイトを優先せざるをえないことによる時間の不足などの阻害要因があることが推察され、その差異は様々な要因が絡み合った複雑なものであることがわかってきた。この傾向は理系学生に類似していた。

北海道の管理栄養士で理系大学び文系大学よりも高い値を示した11項目(Q3, Q4, Q10, Q12, Q13, Q15, Q18, Q21, Q22, Q24, Q26)からは、北海道という地方特有の交通、大学数の不足だけではなく、理系大学で明らかになっていた自ら交流の場を作ることが苦手、自分以外の誰かが大学間交流の場を作ってくれることに依存していると同じ傾向が見られた。一方、一番低い値を示した4項目(Q1, Q7, Q9, Q16)から、大学間交流には興味の高さを示しているように思われえた(表2)。管理栄養士になるには勉強量と勉強時間が取られることから、その特徴を表しているように思われた。今後、医療専門職についても研究課題として、継続的に研究を進めているところである。

管理栄養士養成課程に入学する時点で、ほぼ進路を選択していることになる。管理栄養士は医療専門職や小中高の教員や行政職との関わりも出てくることから、今回明らかになったコミュニケーションに対する苦手意識は克服すべきだと

思われ、さらに今後のキャリア形成を行うにあたって、参考にあるように思われる。

因子分析によって、因子が抽出される傾向を比較したところ、文系、理系、短大では2因子ほどに収束するのに対して、管理栄養士では主に2因子ほどに収束し、6因子が抽出された。

現在、医療系学生の因子分析を行っている。医療系は入学時点で進路がほぼ決定する傾向があり、学年によっては、医師や看護師など医療系や管理栄養士は臨地実習を経験していることから、「学生による大学間交流尺度」では、進路が決まっている学生には適さないかもしれないという仮説を立てていた。しかし、今回の管理栄養士の解析結果から、1. 入学時点で進路がほぼ決定する傾向がある。2. 学年によっては、管理栄養士は臨地実習を経験する。このことから必ずしも臨地実習は阻害因子にはならない可能性が高い。

今後さらなる職種について検討するとともに、医療系や管理栄養士養成課程など、臨地実習の経験の有無や中学校から家族とコミュニケーションを行ってきた大学生に特化した大学間阻害因子を解析していきたい。またこのアンケートは「社会人基礎力」<sup>17)</sup>の一部を測定することができるかもしれない。

## 謝辞

北海道文教大学人間科学部手嶋哲子先生に感謝する。

### \* 研究倫理について \*

本研究で用いられたデータは匿名化されている。筆者は2021年度eAPRINのいくつかの講習を受講済みである。

## 参考文献

- [1] 新見直子, 前田健一 中学生のキャリア意識と家族・友人に対するコミュニケーション内容の関連, 広島大学心理学研究, 8, 67-75, 2008
- [2] 経済産業省(2006.1.209) 社会人基礎学力の関する研究会-中間とりまとめ  
< [https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou\\_wg/pdf/001\\_s01\\_00.pdf](https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/001_s01_00.pdf)>
- [3] 厚生労働省(2006.3.13) YES-プログラムの概要-若年者就職基礎能力支援事業-厚生労働省: YES-プログラム(若年者就職基礎能力支援事業)の対象講座・試験を新たに認定  
< <https://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/03/h0313-4.html>>
- [4] 川嶋太津夫 学生の雇用可能性を開発-英国大学のキャリア教育-教育学術新聞, 私学高等教育研究所, アルカディア学報, No.242, 2006.5.17付
- [5] 経済産業省(2010.6) 大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査  
< <https://selectra.jp/sites/selectra.jp/files/pdf/201006daigakuseinosyakajinkannohaakutonintido.pdf>>
- [6] Benesse 教育研究開発センター(2011) 学生の実体と社会で求められる力のギャップ. VIEW21 大学版 2011 特別号
- [7] 平尾元彦, 重松政徳 大学生のコミュニケーション能力とキャリア意識, 大学教育, 4, 111-121, 2007
- [8] 渡部昌平, 菅原良 大学間交流を活発化するための探索的研究-学生に対するヒアリング調査から-, 秋田県立大学総合科学研究集報, 15, 95-96, 2014
- [9] Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Smith, K. A. Cooperative Learning: Increasing College Faculty Instructional Productivity. ASHE-ERIC Higher Education Report No. 4. Washington, D.C., USA  
<<https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED343465.pdf>>
- [10] 江口彰 インターンシップと正課外活動の経験比較, インターンシップ研究年報. 12, 33-38. 2009.
- [11] 菅原良, 渡部昌平 地方大学における大学間学生交流の阻害要因に関する探索的研究, キャリアデザイン研究, 11, 119-125, 2015
- [12] Kohzaki H., Sugawara R., Watanabe S., et al.: Development and evaluation of a scale for measuring factors obstructing inter-university student exchange, International Association for Educational and Vocational Guidance International Conference 2015 (Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Japan), Proceeding, 2015
- [13] 菅原良, 渡部昌平, 勝又あずさ, 他 首都圏の文系学部における大学間学生交流の阻害要因に関する探索的研究, パーソナルコンピュータ利用技術学会論文誌, 11(1), 1-6, 2016
- [14] 菅原良, 渡部昌平, 勝又あずさ, 他 理系学部学生における大学間学生交流活動の阻害要因に関する探索的研究, パーソナルコンピュータ利用技術学会論文誌, 11(2), 21-26, 2017
- [15] 神崎秀嗣 短期大学における大学間学生交流活動の阻害要因に関する探索的研究, 三重大学高等教育研究, 23, 133-136, 201.
- [16] 矢崎裕美子, 中村信次 インターンシップ経験によるコンピーテンシーの変化-同期と研修の型からの検討-, 日本福祉大学全学教育センター紀要, 1, 3-9, 2013
- [17] 経済産業省(2018.2) 人生100年時代の社会人基礎力について  
< [https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou\\_wg/pdf/007\\_06\\_00.pdf](https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf)>